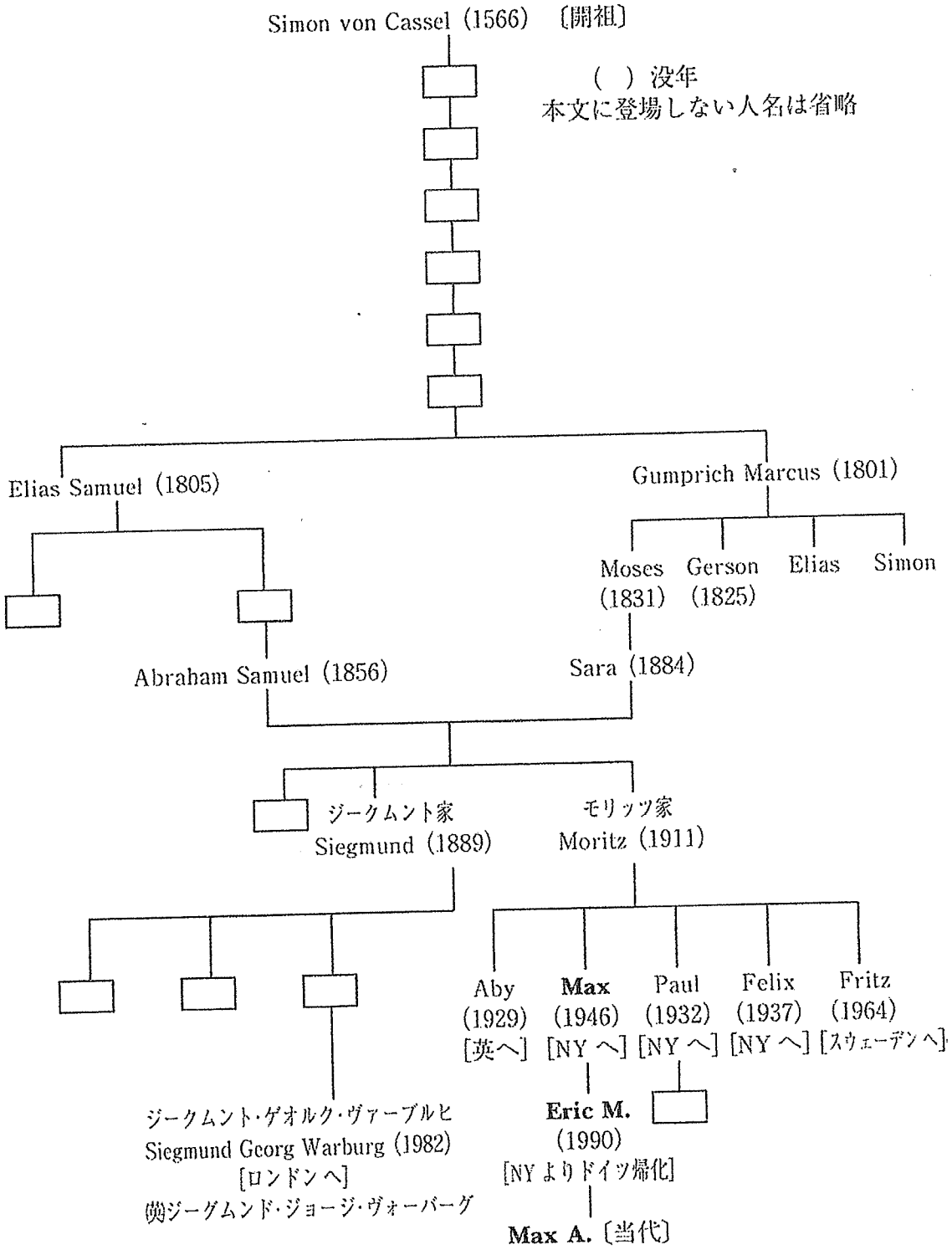
パウルは米国投資銀行クーン・ローブ社創立者の女婿となって米連邦準備制度の基礎を築いた。四男フェリックスは米国同社の総支配人，ヤコブ・シフの女婿となり，末弟フリッツは次男マックスと共に家業を継いだ。前記老エリックは，その次男マックスの長子である。

90年7月のエリックの死後，同行は米国生まれの長男マックスが今の当主である。48年生れ，51歳のマックスは長身で，「ウォーバーグの目」といわれる独特の眼は亡父エリックと渝らない。「私が結婚したのは44歳，6年間で娘ばかり4人」とアメリカ風の直截的なものいいで，それにつられた私の妻の質問に，高い天井が揺れるような哄笑で，「イヤ，イヤ，日本風の見合い(arranged marriage) ではありませんよ」と，夫人のアレクサ・クラムバッハの写真を見せた。父のエリックが高齢になっても若い頃を想像させる粋でキリリとした鋭角的で鷹のような容姿であったのとは違い，当代マックスは率直さとユーモア・愛嬌にみちた2メートル近い偉丈夫で，強烈な活力を放射する積極型バンカーである。「私の代で五行を吸収合併し，あとまだ二，三行」と，新聞記者なら驚くような話を，一介の異国の研究者にするのだから，父エリックの伝統的なヨーロッパのプライベート・バンカー式の韜晦型とは大違いである。

この頭取応接室の壁に黄ばんだ大判の写真が掲げられている。『陛下の命により日本帝国を代表して貴行に深甚なる感謝を捧ぐ』旨の英文と署名が写真の下部に斜めに光ってみえる。大礼服姿の高橋是清総理大臣である。

日露開戦時，正貨準備5,200万円（520万ポンド）しかなかった極東貧乏国の財務官は戦債募集に米国で失望して欧州にまわり，孤影悄然と出席したロンドンの晩餐会(注6)で，隣席の米国人が親しげに来欧目的を聴いてくれた。翌朝，迎えの馬車(注7)でクラリッジ(注8)で会ったのは前夜の米国人。当時モルガンと競う米有力投資銀行，クーン・ローブ社総支配人ヤコブ・シフである。米英共同で1000万ポンド(1億円)引受けるとの決然たる金鉄の一言である。この第1回日本戦債の公募成功後，相次いで第6回まで総額8億円(注9)に達したが，これは平時歳出2.6億円の3倍，日露戦役総戦費の52%にあたる。第4回より独仏を入れた欧米四強国市場での戦債起債成功はシフの後ろ盾なしには全

Warburg 家系図


Simon von Cassel (1566) 〔開祖〕
( ) 没年
本文に登場しない人名は省略
Elias Samuel (1805)
Gumprich Marcus (1801)
Moses (1831)
Gerson (1825)
Elias
Simon
Abraham Samuel (1856)
Sara (1884)
ジークムント家
Siegmund (1889)
モリッツ家
Moritz (1911)
Aby (1929) [英へ]
Max (1946) [NY へ]
Paul (1932) [NY へ]
Felix (1937) [NY へ]
Fritz (1964) [スウェーデンへ]
ジークムント・ゲオルク・ヴァーブルヒ
Siegmund Georg Warburg (1982)
[ロンドンへ]
(英ジーグムンド・ジョージ・ヴォーバーグ
Eric M. (1990)
[NY よりドイツ帰化]
Max A. 〔当代〕

くの不可能事だった。シフと高橋の邂逅は当時危急存亡の淵に臨む帝国日本にとって運命的であったとしかいいようがない。

高橋の問いに答えた全米ユダヤ人連盟会長シフの援日理由は僅か二言だけだったと伝えられている。「わがユダヤ民族を永年迫害せるは露国皇帝。わが同胞のため日本戦債がたとえ紙屑になろうとも同皇帝にせめて一矢なりとも報いたし」。欧州列強王室は各々縁続きであり，白色人と闘う黄色人に白色人国が公然と金融支援を行うのはいかがなものか，また当時欧州最精強の露陸海軍の前に立ちふさがる創設30年弱の極東新興国貧乏国民軍など鎧袖一触というのが，客観的な当時のカントリー・リスク判定の大勢ではなかったか。露国に歴史的にも地政学上も親密だった独逸金融界に極東への窓を初めて開いたのは，親戚シフの口利きで第4回公募から参加したヴァーブルヒを先頭とする独逸協調融資団である。前記高橋総理の写真はエリックの父，当代のマックスの祖父たるマックス・モリッツ・ヴァーブルヒに宛てた帝国日本の感謝状であった。クーン・ローブ，ロスチャイルド，ベアリング等々と結ぶ，この欧州列強銀行団の関係者の胸中に漂う弱小国ニッポンへの想いは複雑であったに違いない。日本の強運はしかし日露戦争で尽きた。高橋は凶弾・凶刃に殪れ(注10)，日露戦後37年目に突入した対英米戦で日本の栄光は消滅した。

備忘録でマックスは高橋を評していう。「高橋は私の生涯で会ったいかなる国のいかなる蔵相よりも最も計数に明るい人物であるばかりか，困難を極めた交渉のいかなる瞬時においても礼儀正しく，かつ無条件で絶対的に信頼できる人間であった(注11)」。彼の備忘録は素っ気なく続く。「クーン・ローブ社が主幹事となった米国国際協融銀行団よりのドイツでの引受け可否照会に私は欣然と応諾した。有能な銀行家なら当然の決断にすぎない。私は直ちにベルリンで外務次官の即座の許可を得て，ロンドンへ向った(注12)」。

高橋自伝の描写は要旨，次のごとくである。当日はハンブルク港外での伝統あるヨット大会。恒例のヴィルヘルム二世皇帝御召艦に陪乗のマックス宛てにシフが高橋の依頼で打電した電信が転電されてきた。「日本帝国戦債第四回三億円のうち，ドイツで一億円引き受けるか否か電返乞う」。同艦上には中央銀行総裁はじめ，ベルリン財界巨頭連も多数陪乗していたので，マックスは直ち

に電文を銀行家達に回覧した。一同は期せずして臨席の皇帝陛下のお考えを伺うべしとのことで，直ちに言上のマックスに対し，言下に綸言あり。「やってやれ」。マックスはその場から電信にてこれも一言，「承諾」と返信したのであった。

この極貧国日本の戦債引受けを契機として欧米金融界の眼は極東に向けられることとなり，そのドイツの発起人，ヴァーブルヒはドイツ帝国外交政策にタッチしはじめるのである。帝国外務省と同行の関係は深まってくる。

ドイツ金融界は，ヤイデルス(注13)が描写した全独逸帝国内の大銀行群が粛々とベルリン六大銀行に統合されていく系列と隠然たる実力と覇権を秘めつつ，巨大独逸産業群の国際的進展を裏から支援・指導した，これら一群のPrivatbankierによる国際資本市場の連帯といった別系列とが併存していたのである。いわば自己の名声と信望と個人資産のみに拠って冷静・毅然と国際金融資本市場での市場形成権を専ら情報分析力と果敢な開拓精神で掌握していた，これら個人銀行家群と，いわば商工業融資中心の巨大資本力を擁する多店舗型大銀行群との望ましい両群の棲み分けと勢力均衡が維持されてきたのであった。

1913年末には全独で1,220行を算した，この独特な個人銀行は31年の金融大恐慌後に激減し，38年末には520行と半減した(注14)。ユダヤ系は33年末には約200行と推定されているが，これら個人銀行群の上に，酷烈な悲運が襲う。33年春からのナチ政権独裁下でのユダヤ系金融機関の『アーリア化（捨て値の評価と苛烈な強制徴税による非ユダヤ人への強制売却)』の高波である。マックスに光輝ある帝国国債引受団からの除籍を告げたのは，永年の隠れた後ろ楯だった経済相兼ライヒスバンク総裁，ヒャルマール・シャハト(注15)であり，時に37年9月である。かくしてマックスとその銀行の運命は決まった。39年末にはユダヤ系銀行は市場から一掃された。

さて，ウォーバーグ家系の中興の祖たるサラの二人の息子，長男のジークムント，次男のモリッツの両家系に遡らねばならない。まず，長男家の3代目，ジークムント・ゲオルク・ヴァーブルヒ，英国では後にサー・ジーグムンド・ジョージ・ウォーバーグ（略SGW）の話である。彼は1902年ハンブルクに生まれ，ロンドンのロスチャイルド，米国のクーン・ローブで修業し，次男家の